

---

# 野良猫

烏野 某

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

野良猫

### 【ZPDF】

Z9733V

### 【作者名】

鳥野 某

### 【あらすじ】

ある「野良猫」を拾った少年の話。

(前書き)

友人たちとやっているサイトに載せていく短編です。

「この間、猫を拾つたんだ」

昼休み、クラスメイトたちの声が溢れる教室。

「コンビニのパンを齧りながら、霧島はふいにそんな話を口にした。窓を眺めながらの言葉だったので、正面に座っている赤松は最初自分に向けられたものだとは気付かなかつた。弁当をつっこつとした箸を止めて、少し丸くなつた目を友人に向ける。

「猫？ お前、猫好きだつたっけ？」

「この見えて犬よりも猫派なんだ」

と聞いてもいなことを答える霧島。またか、と赤松はバレないよつに小さく息を吐く。

この少年は時々、赤松にとつてびつでもいいことを唐突に放す癖があつた。大抵は「知るかそんなの」と一蹴できる内容で、最近では適当に相槌を返してやりすごしている。

そんな赤松に気付かないまま、霧島は続けて言つた。

「じつに可愛いらしいというか、生意気といつか……まあ、そんな感じの猫なんだ。いるだろ？ 毛並はいいくせに、やたらと性格が悪いやつ」

「ああ、そうだな。で、その猫、どこで拾つたんだ？」

霧島の口に再びパンが入れられたので、質問への答えは十秒ほど遅れることになった。パンを咀嚼しながら、その時の記憶を思い出しているようだった。

会話が無くなり静かになつた。一人の横を、教室を出ようとする女子生徒たちが通り過ぎていつた。

「確か、駅前だつたかな」

口の中身をジュースで流し込み、霧島は言った。

「バイトの帰りに駅の近くを通ったところで見つけたんだ。いかにも行くあてが無いような感じでさ。寂しそうにしてた」

んで、可愛そうになつたから捨てたのか」

いや、最初はそんな気はなかったよ。別に興味も無かったし、そのまま通り過ぎようとしたんだ。今思つと、無視するなんて選択をしなくてよかつたと思うけど」

一  
え

赤松の箸が、弁当箱の隅にあつたソーセージを挟んだ。

「じゃあ、何で拾おひと酔つたんだよ」「みー

「放つておくと危なこと悪かったからや。そのまま通つ過あらむつとこ  
たら、変なやつらがここに絡んできたんだ」

いや、別に変な、というほどではなかつたかな、と付け加える。中身のなくなつたパンの袋をクシャリと握り潰し、コンビニ袋の中

に放り入れた。

「たぶん隣り町の高校の生徒だったと思う。他校の制服にはたいして興味無いからあまり覚えてないけど、この辺りでは見ない顔だったからね」

それはお前が知らないだけで、この学校の生徒だった可能性もあるんじゃないか？」と赤松は思ったが、口にすることはなかつた。何故かは知らないが、霧島はこの町内に住んでいる人の顔をだいたいは覚えていて、だから町の住人とそうでない人の見分けが簡単につくのだという。

どうにも胡散臭い話だが、赤松は彼が嘘を吐いたり見栄を張つたりするような人間でないことはよく知つていて。だから（多少過剰にした部分はあるかもしれないが）本当にそつなんだら、と納得する。

「そういうえば、あの子もこの辺りに住んでる子じゃなかつたよ。顔を見てすぐ分かつた」

「あの子って、猫のことか？　お前、猫の顔まで分かるのかよ」

さすがにそれは嘘だろ？、と疑問の目を寄せる赤松。

本当だつて、と霧島は苦笑し、

「後で直接聞いたから、間違いないよ。嘘をついていなければの話だけど」

と言つた。

「へえ」

相槌を打ちつつ、赤松は彼の奇妙な言い回しに内心で首をかしげた。

その言い方だと、まるで猫がそう言つたようではないか。

「まあいいか……で、結果から考えるに、お前はそれを助けたんだな？」

「ああ。さすがに可愛そくなつたし、色々とひるをかつたしね」「めずらしく不快そうな表情だ。

「あの」霧島をこんな表情にさせるとは、その他校の生徒たちはほど酷い態度を取つっていたのだろう。

まあ、猫に手を出すような奴らだしなあ。

箸を持つた手で顔を覆い、赤松は顔も知らない他校の生徒たちへと同情の念を送つた。

見た目は細く、性格は穏やかな霧島だが、一度怒った時はそれもつ、まさしく天国が地獄となつたような変貌を遂げるのだ。しかも見た目のわりに喧嘩慣れしており、悪魔、または修羅と化した彼が振るう暴力は、それなりに鍛えた大人であつても容易に止めることはできない。

今から半年ほど前に、町内を騒がせていたある暴走族グループがいた。彼らは深夜の町をバイクで走り回り、騒音を撒き散らしていた。時には仕事や学校帰りの人たちに暴力を振るつたこともあり、それが霧島の怒りに触れてしまい、結果、その暴走族は町から追い出されるどころか、跡形もなく壊滅してしまった羽田となつた。当事者の一人であり、霧島による「無双」の光景の唯一の目撃者である赤松は、その時のことによく覚えてい。その時から霧島を怒らせないと誓つた記憶と共に。

『一年の霧島が暴走族を壊滅させた』という噂は今でも広まつて、ゆえに学校の中では彼は敬遠される存在だつた。迷惑だつた連中を退治してくれたことは感謝しているが、やりすぎなほどの暴力が、いつ自分たちに向けられるかわからない。クラスメイトの霧島を見る視線は、そんな複雑な感情が渦巻いたものばかりだつた。そうでない者なんて赤松一人くらいだ。

「そんで、そいつらは？」  
「いきなり殴りかかってきたから、適当に腹を叩いたら帰つてくれたよ」

予想通りの結末に、むしろ笑みが浮かんでくる。その時の様子は、まさに傑作だつただろう。

「……どうした？　いきなり笑い出して。なんか気持ち悪いぞ」「うるせえ、お前に言われたかねえよ…………それで、その後は？」  
「ああ、そいつらを追い返した後、結局そいつを家に連れて行くことにしたんだ。また同じようなやつが来ないとも限らないし」

「ふむふむ」

「最初はそいつ、凄く嫌がつてたんだ。まあさつきまで殴つたり殴られたりを見てたから、怖がつてたんだと思うけど。でも俺として

は心配だから、なんとしても連れ出したかったし。で、何とか説得して納得してもらつて、一緒に家に言つたわけよ」

「ほつほつ……まあ、そりやあ怯えても仕方ないだろうな。目の前で喧嘩があつた後じやあ、自分がどうなるか分かつたもんじやないし。引っかかれたりはしなかつたのか?」

「ああ、顔面を殴られそうになつたけど、ギリギリでかわせて良かつた」

「……猫つてパンチとかできたつけ?」

そもそも拳を握ることすらできないんじやないか?」

「…………まあいいか。じゃあ、今はお前の家でお留守番つてわけか」

うん、と頷く霧島。

「つむは両親がつむとも屋外にいるし、ちよつと良かつたよ。もしいたら絶対に怒られた」

「『家では猫は飼えません! 早くもとの場所に返してきなさい!』ってか? 何かドラマみたいな感じだな」

「んー、いや、多分そういうのとは違うけど。まあそんな感じだろうな。一人とも、俺と違つて生真面目だし」

声が深刻そうな色を持ち始める。霧島がそう言つのなら相当なのだろう、と赤松は苦笑した。

「そりや帰つて来たときが大変だな。……せついや、その猫病院には連れて行つたのか?」

その質問に対し、霧島の目がぱちぱち、と大きく瞬いた。何を言

つてゐるんだ、と言いたげな表情だつた　まさか。

「もしかして、連れて行つてないのか？」

「いや、腹は減つてたみたいだけ別に健康そつだつたし、夕飯食べさせたら機嫌良さそうにしてたし。なに、病院つて連れて行かなきやダメなんか？」

「当たり前だろ」即答する。「いいか、猫つてのは色んなとこから病氣持つてくる可能性があるんだぞ。基本色んなところに行くからな。元々野良だつたらなおさらだ。傍田には元気そうに見えても死に関わる病氣にかかつてゐる可能性だつてあるんだから、拾つたらすぐ病院に連れて行つて診てもらうのが普通なんだ。お前そんなことを知らないで猫を拾つたのか？」

「う、うん」

早口で一気にまくし立てる友人の姿に驚いたのか、霧島はややぎこちなく頷いた。背もたれに深く背を預け　　というか、大きく仰け反らせている。そこで赤松は、自分の顔がやけに霧島に近付いていることに気付いた。興奮して話すうちに、いつの間にか顔を寄せてしまつていたらしい。

目を丸くしたままの霧島を見て、ゴホンと咳でごまかして顔を離す。背中にいくつか好奇の視線が刺さるのを感じて振り向くと、三人ほどの女子たちがさつと顔を明後日の方向に向けた。確か、よく『B.L.』なるものの話をしている文芸部のグループだつたか。そう考えたところで、赤松の顔が青くなつた。

そんな彼の様子に、再び霧島が疑問の目を向ける。

「……どうしたんださつきから、笑つたり早口になつたり顔近づけたり青くなつたり。はつきり言つて気持ち悪いぞ」

「……」

さすがに今回さつるせえと返す氣力も出ず、「何でもない」と女子グループから田を背け、顔を戻す。

「……ま、まあともかく、今週中にでも病院に連れて行つたほうがいいぞ」

「？　ああ、とつあえず今日帰つたら、具合悪くないか聞いてみよ」

そこで予鈴が鳴り、赤松は空になつた弁当箱を片付け、元の席に戻つていつた。

結局、霧島の最後の言葉の違和感に彼が気付くことはなかつた。

学校が終わり、霧島は真つ直ぐに家へと帰宅した。元々帰宅部である上に今日はバイトも休みなので、まだ外が明るい内に家に着いた。

「ただいまー」

玄関に入ると同時に声を上げるが、返事は当然返つてこずに、居間のほうからテレビのものらしい声が聞こえてくるだけだった。

まあそりやそうだ、と思いながら靴を脱ぎ、居間へと向かう。きっと「猫」はそこにいるのだろう。

リビングのドアを開けると、予想通り、「猫」がいた。ソファにだらしなく寝転がって、テレビを眺めている。長めの茶髪がカーペットの上に落ち、奇妙な色の滝を作っていた。

ただいま、ともう一度言つと、「猫」は緩慢な動きで振り向き、「ん」軽く手を上げた。とても居候がするよつた態度ではないが、いつもことなので気にすることはない。彼女と過ごした数日の中で、すっかり慣れた霧島であった。

「留守の間何もなかつたか?」

「ん、別に」

端的に　　実にどうでもよさそうな態度で答える「猫」。視線はすでにテレビの方に戻っている。その様子を眺めながら、「だらしないなあ」とここ数日で何度もかの感想を口にした。「猫」は白い大きめのシャツに真っ赤なジャージと、およそ『思春期の女子』というにはこたさか色氣の無い格好をしている。まるで深夜に見かけるヤンキーめいた女性のようだった。ややボサボサになつた茶髪もあって、どう見てもそのようにしか見えない。

「猫」曰く部屋着はこれ一つしかないし、スカートを家の中で履くのも面倒臭いらしい。霧島としては少し説教したいくらいなのだが、女性側の事情など全く知らないので激しく言つことはできない。

その上ああ見えて掃除・洗濯・料理などの家事はしっかりとされているので、文句なんて言いたくても言えない状況だった。すっかり家での生活に慣れてやがる。

小さく溜息を吐いた後、霧島は今日の昼休みに友人と交わした話を思い出し、その場に鞄を置いた。

いつまでも自分の部屋に行かない家主を訝しく思ったのか、「猫」が再び顔を向ける。そんな彼女に近付いた霧島は顔の横に座り、目を丸くした彼女の頬に両手を当てた。

「…？…？…？…んな、な…？」

「猫」が大きく顔を上げるのにも構わず、霧島はそのまま顔を寄せる。両手に伝わる男性とは大きく違う柔らかな頬の感触。「猫」が顔を赤くするにつれて、ゆっくりと熱を持ち始めていく。口を半開きにして大きく見開いた目を向ける「猫」の顔を、霧島はまじまじと隙間なく観察する。顔は若干赤くなっているものの、顔色自体は悪くない。目も問題無いようだし……あ、ニキビ発見。あとで教えておこう。

三十秒ほど嘗め回すように見た後で、ようやく顔を挟む手を放し、彼女を解放する。既に上半身を起き上がらせていた「猫」はさりげりと後ずさりし、ソファの背もたれに深く背中を押し付けた。顔は以前赤いままだ。

「な、ななな、なななな、何すんだよ！」

「いや、お前が病気になつてやしないかって思つてさ。気分が悪いとかないか？ 吐き気がするとか、どつかが痛いとか」

「き、気分は悪くないけど気持ち悪い… いきなり何なんだよ！」

「なに、気持ち悪いってことは、吐き気か？ よし、急いでトイレに行こう。動けないなら俺が運んで」

「あ、ああ、あたしに触るんじゃねえええ…」

「ふがぬんつ！」

悲鳴混じりのアッパーが顎に直撃し、リビングに霧島の倒れる音が大きく響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9733v/>

---

野良猫

2011年10月8日10時56分発行